
事業報告

平成19年度
公開講座概要

総合研究所では、毎年、生涯学習の実践・研究成果の公開・大学の地域への開放という観点から、地域社会との協力関係の構築をめざし「公開講座」を開催しています。

「公開講座」は、(1) 本学が企画・共催 (2) 自治体等との協力 (3) 産官学連携事業で行なっています。詳細については、下記をご参照ください。

【(1) に分類される講座】

< 1 > 第28回 せいぶ市民カレッジ 奈良大学文化講座

- <開講年> 1980年
<テーマ> モノが語る文化・歴史
<募集定員> 300人(全5回)
<会場> 学園前ホール
<共催> 西部公民館・奈良大学

7月7日 石碑が語るもの(中国石刻学入門)

森田憲司

「石刻史料」への関心が中国史研究の各分野で高まっている。この講座では、一般の方には耳なじみの少ない「石刻」について、現地で撮影した写真や拓本を見ていただきながら、石刻とは何か、なぜ今注目されているのかを、お話しした。

まず最初に、「石刻」という言葉を解説し、次にその種類を紹介した。そして、現在注目されている「石刻」の史料としての価値について、中国の文献には後代の編纂物が多い中で、石刻は同時間性という特徴を持つこと、またきわめて個別具体性の強い史料であることについて、实例を挙げて述べた。

7月21日

きわだ
黄蘗や頼みなるらん
- 狂言の言葉一片 -

柳田 征司

狂言「雷」は、都で生活できず東に下る医師が、武蔵野で雲間を踏みはずして落ち、腰を痛めた雷を治療するという話である。その冒頭は「薬種ももたぬやせぐすし 薬種ももたぬやせぐすし きわたやたのみなるらん」という謡ではじまる。「くすし」は「くすりし」の転、医者とは古くは薬を処方する人の意であった。ところが、都落ちするこの医師は薬種を持たず、「きわだ」を頼みにしているのである。「きわだ」は「きはだ」とも言い、黄蘗のことで、樹皮の内側が黄色いのでこう呼ばれる。陀羅尼助丸の主原料でもある。数ある薬種の中でなぜきわだが選ばれたのであろうか。そのことについて考え、それを通して狂言の言葉と笑いの変遷の一端をうかがってみたい。

8月4日

奈良盆地北部の村々における地割の復原
- 明治期の地籍図から -

土平 博

現在は新興住宅地が広がっている奈良盆地。かつては、田畑が一面に広がり、所々に集落やため池が点在する農村景観が広がっていた。そのような奈良盆地の景観を、明治期の地図から明らかにしてみたい。この講座で用いる地図は、明治期作成の「地籍図」である。「地図」という“もの”から農村景観を理解しようとするのがねらいである。

普段、「地籍図」と接する機会は少ない。「地籍図」は1村ごとに作成された。それぞれの図面には田畑や家屋などが1筆ごとに描かれている。この地図をながめてみると、さまざまな発見がある。それらを紹介してみたい。描写方法などは村ごとに統一されていたとはいえ、実際には随所に違いがみられ、ユニークな表現もある。当時の歴史的・地理的情報が凝縮された財産ともいえよう。この講座では地図をみる楽しさをお伝えしたい。

9月15日

鳥毛立女の光と影

三宅 久雄

正倉院宝物の中でもとくに有名な鳥毛立女屏風は、756年、光明皇后が東大寺大仏に献納した亡き聖武天皇遺愛の品の一つである。樹下美人図とも呼ばれ、薬師寺の吉祥天画像とともに天平美人の双璧をなしているが、その華やかさの影には、永い不遇の時代があった。

中世以降、この屏風の由緒が忘れられていき、鳥毛をつけた華麗な衣服は羽毛がほとんどはがれ落ち、屏風を飾る豪華な表具も失われてしまった。ようやく明治に入って、鳥毛立女に再び光

があたりはじめた。度重なる修理を受け満身創痍とも言えるが、その由緒正しさが認められ、新たに貴重な事実も判明し、引き換えに我々が得たものは大きい。

9月22日

蕪村的生活

永井一彰

近世を代表する俳人として、ともすれば芭蕉と併称されがちな蕪村ですが、その俳諧への関わり方はずいぶんと違います。芭蕉は明確な歴史意識を持ち俳諧に取り組んでいたのに対し、蕪村にはそのような意識が全く無く、俳諧をその場その場で気楽に楽しんでいます。蕪村が俳諧を「楽しむ」ことが出来たのは、彼の本職が絵描きであって、そちらの収入で生活を一応支えることが可能だったからなのですが、実を言うと、絵描きの仕事もけっこう場当たりであったことが彼の手紙から判ります。そのような蕪村が、何故優れた俳諧作品・絵画作品を残すことが出来たのでしょうか。手紙を通じて「蕪村的生活」の秘密を探ります。

< 2 > 第3回 高の原カルチャーサロン—— 奈良大学心理学講座・文学講座

- <開講年> 2005年
- <テーマ> 前期：社会生活と心理学 後期：ことばの力
- <募集定員> 200人（全6回）
- <会場> 奈良市北部会館市民文化ホール
- <共催> (財)奈良市文化振興センター・奈良大学

5月12日

社会生活と心の健康

前田泰宏

私たちは社会と何らかの関わりを持ちながら、日々の生活を送っています。私たちの心は社会や人間関係の中で豊かに成長していくのですが、時には様々なストレスや問題状況に遭遇し、心が苦しくなって悲鳴を上げることもあります。

本講座では、主として対人援助の心理学である臨床心理学の立場から、社会生活の営みの中で心の健康を維持するにはどのような事柄に留意すればよいのか、ということについて参加者と一緒に検討しました。そのポイントは、以下の2つに集約されます。

一つは、心のゆとりのある日常生活を営むこと、今一つは、“問題”に対する見方や関わり方を変えること、です。具体的には、前者に関しては、時間的・空間的・对人的にゆとりがあるだけでは十分ではなく、知的にも情緒的にも思考できることや“遊ぶこと”ができることが必要で

あること、後者に関しては、“問題”を多面的な視点から柔軟に捉えるようにしながら、これまでの自らの“解決努力”を時には見直し、失敗を恐れずに“何か違ったことを試みる”ことが大切である、ということについて論じました。

5月19日

いま若者に何が起きているのか

－犯罪・非行心理学の観点から－

友 廣 信 逸

最近の若者に何が起きているのか、主として少年非行の観点からの考察を講義した。

まず近年の少年非行の趨勢を犯罪白書に基づく統計を紹介して概観し、(昨今のメディアの報道から印象づけられているほどには)件数が増えているわけではないことを述べ、ただし質的な変化は否めないことを説明した。

その上で、平成7年の神戸児童連続殺傷事件以来の、いくつかの少年重大非行を例に挙げ、最近の少年非行において、いわゆる「いきなり型非行」が増加していること、“キレる”若者・成人が増加している現象に言及した。

また、一方で不登校や“いじめ”が社会問題化している現状についても説明し、家庭の“子育て”の大切さ、生きる力を育てる教育の必要性を論じた。

6月2日

生涯発達と臨床心理学

－自己実現への旅立ち－

千 原 美 重 子

臨床心理学とは、個人や集団の心理的な不適応状態を科学的に理解・把握して、より適応的な状態になるように助力をすることを目指しています。また、不適応状態にならないように予防するための実践的ならびに理論的研究を行っています。

私たちは、卵子と精子が受精して命が芽生え、子宮内に着床し、羊水のなかで安全に守られて、約280日後に産声を上げて誕生を迎えます。発達は連続していますが、発達の大きな節目をまとめると、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期と分けることができます。発達の変化のときは、心理・社会的な危機が生じます。

生きることは旅をすることと喩えられることがあります。新幹線に乗るのか、飛行機、船、徒歩、自転車、大八車を引いていくのか、交通の手段により、全く景色が違ってきます。また行き先をどこにするのかも個人によって異なります。旅には、パートナーが必要です。人をモノ化したような自分本位な関係は、1.5関係といわれ、二者関係とはいいません。現代では、1.5関係への閉じこもりが問題となっています。

性格が成熟した特徴は、自分の生活を意識的にコントロールでき、自分について理解をし、現

在にしっかりと結びついており、新しい目標や経験に対してチャレンジングな人生を歩もうとすることだといわれます。自己実現とは、自己の潜在的な可能性や、能力を最大限に生かして、生きていることの充足感を感じることです。これは、他者と比べて優秀で言うことが出来ないことです。日々生きていることが、個性化に向かう旅といえます。

10月6日

讃歌の時代、万葉のミヤコ

上野 誠

万葉集の時代は、「讃歌」の時代であった。舒明天皇は、香具山に登って「あきづ島 大和」を誉め、柿本人麻呂は吉野の山水を誉めて天皇讃歌を歌い上げた。今回は、真の万葉の時代の幕開けとなる舒明天皇国見歌を取り上げて、讃歌のその背景を考えてみたい。舒明天皇こそは、新皇統の祖なのである。

高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代〔息長足日広額天皇〕

天皇、香具山に登り望国【くにみ】したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど

とりよろふ 天の香具山

登り立ち 国見をすれば

国原は 煙立ち立つ

海原は かまめ立ち立つ

うまし国そ

あきづ島 大和の国は

(巻一の二)

と称えられる讃歌の景について考えてみた。

10月13日

まさき みこ うたうら 正しき巫女の歌占〈王朝の神歌〉

木村紀子

奈良朝から平安朝にわたって、支配階級を中心に、心のよりどころとし、社会規範ともしていたのは、儒教・仏教といった外来の思想や宗教だった。しかし、溯ればヒミコにも繋がる巫術（シャーマニズム）は、社会の底辺にしっかり生き続けていて、恵心僧都源信・鳥羽上皇といった高位の人々も、そうした巫女の歌い出す神のお告げに、生き方を左右された由の説話が残されてもいる。

王朝後期の巫女達の、そうした活動の姿にスポットをあて、その言葉の呪力を再確認したい。

10月20日

近代詩の魅力
－親子を描いた作品を通して－

藤本寿彦

近代詩というと、島崎藤村のように青年の恋愛を詠った詩人を思い浮かべる人が多いでしょう。大正時代になって子供の世界が目されるようになりました。「童謡」という詩のジャンルが生まれましたのは、そのためです。当時の「童謡」は今と違って、重要な詩の形式でした。それは時には「金魚」という作品を書いた白秋のように、教育界から批難されるものでもあったのです。これはどうしてなのでしょう。

昭和期に活躍した詩人の多くが若い頃、「童謡」を描いています。その中に丸山薫という詩人がいます。彼の作品には「オトウサンナンカキリコロセ/オカアサンナンカキリコロセ/ミンナキリコロセ」と泣き叫ぶ少年が登場します。これまでいわゆる「きれん」少年を描いたものだと考えられてきました。しかし「童謡」として読解すると、違った少年像が浮かび上がって来そうなのです。谷川俊太郎の作品も紹介しながら、親子の関係や少年の心を考えて見たいと思います。

< 3 > 第1回 上方文化講座

- <開講年> 2007年
- <テーマ> 古代の難波・大阪の文学
- <募集定員> 180名(全2回)
- <会場> 大阪府立文化情報センター

12月1日

考古学からみた河内王朝論

白石 太一郎

第2次世界大戦後、日本の古代王権は崇神に始まる古王朝(三輪王朝)、応神に始まる中王朝(河内王朝)、継体に始まる新王朝(継体王朝)の三王朝が交替したとする王朝交代論が提起された。このうち河内王朝論は、それまでの奈良盆地に基盤を置いた王朝に代わり、4世紀末葉以降、大阪平野に基盤を置く新しい王朝が成立したとするものである。考古学的には、3世紀後半から4世紀後半まで一貫して奈良盆地に営まれていたヤマト政権の盟主、即ち倭国王の王墓と考えられる巨大古墳が、4世紀末葉以降大阪平野の古市・百舌鳥両古墳群に造営されるようになる。この王墓造営地の移動は、古墳がその政治勢力の本貫地に営まれるのが原則であったとする立場に立つ限り、大阪平野の勢力が王権を掌握した結果にほかならないと考えられる。ただそれは王朝の交替といったことではなく、各地の首長たちによって構成されていた首長連合の盟主の交替にほかならないことを述べた。

12月8日

漱石と大阪・漱石の大阪

浅田 隆

夏目漱石は明治40年3月、教員生活をやめ朝日新聞の専属作家となった。その折、大阪朝日新聞社関係者との晩餐会に出るべく大阪にやってきた。これが初回来訪。つぎに明治42年10月、満韓旅行の帰途にも大阪に寄り、天下茶屋に長谷川如是閑を訪のう。さらに明治44年、朝日講演旅行に参加して8月の関西を講演して回る。漱石の大阪来訪はこの3回に過ぎないが、最後の講演旅行では暑熱の中体調を崩し、北浜にあった湯川胃腸病院に入院せざるを得なかった。

漱石が大正1年12月から翌年にかけて発表した作品『行人』には、上記のような漱石の大阪体験が冒頭の章「友達」に素材としてうまく散りばめられている。元来漱石は自己の体験を忠実に作品化するような作家ではなく、体験を素材にしながらも新たな意味づけ（フィクション）が為されて作品に取り込まれている。

講座では体験と作品を対比して、漱石の創作工房をのぞいてみる形をとった。

< 4 > 第7回 世界遺産公開講座

- <開講年> 2001年
- <テーマ> 世界遺産とその周辺
- <募集定員> 100名（全6回）
- <会場> なら奈良館
- <共催> なら奈良館・奈良大学

4月15日

ふるさとを歌う万葉歌

上野 誠

『万葉集』では、平城遷都以降、フルサトといえは飛鳥を指すという原則があった。すなわち、飛鳥での生活体験を共有した人びとにとっては、飛鳥は皆が共有するフルサトなのである。このような意識は平城京において育った次世代にも受け継がれたのであった。山部赤人が、飛鳥を追懐するのもそのためである。

神岳に登りて、山部宿禰赤人が作る一首〔并せて短歌〕

みもろの 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎに 玉葛絶ゆることなく ありつつも 止まず通はむ 明日香の 古き都は 山高み 川とほろし 春の日は 山し見が欲し 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは騒ぐ 見るごとに 音のみし泣かゆ 古思へば

反歌

明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに

(巻三の三二四・三二五)

内容はまさに、古き都となった飛鳥の自然を愛で、昔を振り返るものである。山もよい、川もよい、春もよい、秋もよいと飛鳥を讃える歌である。この歌で赤人が、フルサトを代表する景として取り上げたのが、飛鳥のカムナビと飛鳥川である。「カムナビ」とは、まさにその土地にいる神のことである。それは、

故郷を偲ふ

清き瀬に 千鳥妻呼び 山の際に 霞立つらむ 神奈備の里
年月も いまだ経なくに 明日香川 瀬々ゆ渡しし 石橋もなし

(巻七の一―二五・一―二六)

という例からも、確認できるところである。「故郷を偲ふ」といえば、山はカムナビ、川は飛鳥川なのである。当日は、飛鳥がフルサトになってゆく過程を平城生活者の視点から考えてみた。

5月13日

日本の自然遺産地と人々とのかかわり

池田 碩

ユネスコが指定する世界遺産には、自然・文化・複合遺産地がある。このうち今回は自然遺産地の状況について報告する。

日本では1993年に巨大な杉の大木を有する「屋久島」とブナの原生林に包まれた「白神山地」が指定され、2005年には流水がもたらす豊かな生態系の連鎖地域として「知床」が加わった。次の候補地としては「小笠原諸島」・「南西諸島」が挙げられている。

「知床」地域が指定されて、丁度1年後にゼミの学生達と訪問し、この間での変化や問題点などについて調査した。その結果わかってきた主なことを記すと、①観光客の急増により自動車の渋滞が激しく、指定駐車場も混雑し、路上駐車が増加した。②ゴミの量が指定前の2倍に増加。不法投棄されたゴミをエゾシカ・熊などが捕食。それによりエゾシカだけでなく熊までもが人間を恐れなくなってきた「新世代熊」も出現。③保護区域の設定による漁域の縮小が漁業従事者に与える影響も大きい。④大規模なりゾートホテルの進出が既存宿泊施設の経営を圧迫してきている。などいろんな状況が現出してきた。

世界遺産地を維持していくことは結局、住民の生活・産業・観光と自然保護との両立が住民の合意を得られることを原則に計られていかねばならず、維持の難しさを感じた。

6月10日

法隆寺の創建と聖徳太子

東野 治之

法隆寺は、金堂の薬師像の光背銘や、瓦の文様から、七世紀始めの建立と考えられている。創建の伽藍は西院の南東にあったが、天智九年(670)の火災で全焼した。この創建法隆寺の特色

は、聖徳太子の住んだ斑鳩宮と、方位や使用尺度を揃えて計画されているところにある。宮と寺を造営が一体的に行われるのは、これより後、舒明天皇の百濟宮と百濟大寺の例があるだけで、太子の仏教信仰の厚さを物語るとともに、この時代が仏教重視の時代であったことを示している。6世紀末から蘇我氏主導で始まった法興寺（飛鳥寺）と、やや遅れて造営された法隆寺は、寺名の上でも対になって「仏法興隆」を表現しており、三宝興隆の宣言された時代の特徴を現していた。この特色は、6世紀末から7世紀前半にかけて、蘇我氏や太子周辺で行われた「法興」年号からもうかがわれる。五重塔の心柱に使われた6世紀末の木材は、この時期に伐採して備蓄されていたものと考えられる。

7月8日

わが町すべてが世界遺産

－イタリア シェナ・サンジミニャーノ・ラベンナ－

西山要一

シェナはローマとフィレンツェを結ぶ交通・交易の要衝にあつて中世には金融業が栄え、世界最古の銀行、最古の都市計画条例を誇る。シェナ派絵画、パレオの祭りで名を馳せる。

サン・ジミニャーノはサフランで黄金色に染める繊維産業が町を栄えさせ、その富の象徴として林立する塔の景観が素晴らしい。ともにトスカーナの丘に華麗な姿を顯す。

エミリア・ロマーニャの平原にあるラベンナもまた海上交通・軍事の要衝として発達し、5世紀始めには西ローマ帝国の首都がおかれた。サン・ピタレ教会とガラ・ブラチディア霊廟のモザイクは今も色あせることはなく、モザイク美術の研究センターを自負する。

華やかな歴史に彩られた三都市も近世以降は一地方の町として命脈を保ち、第二次大戦後は近代化に乗り遅れたかに見えた。しかし、町の景観と伝統的な生活をかたくなに守り続けたかに生き続けてきた人々の力、それが今、世界中からの多くの観光客をひきつけている。町の佇まいのみならず、人々の生活と空間が世界遺産としての輝きを放っている。

8月5日

中世奈良の成立

－重源上人とお水取り－

丸山幸彦

10世紀以降、かつての平城京の一角に位置する興福寺・東大寺の門前町として、中世の奈良が形成されていく。「平家物語」によると、12世紀末に起こっている治承・寿永の乱（源平の争乱）に際し、平氏の焼き討ちにより東大寺大仏殿をはじめとした南都の大伽藍は周辺の多くの在家（町屋）とともに焼失する状況が描かれているが、そこには奈良が相当規模の町として発展しつつあることがしめされている。焼失した大仏殿の再興に立ち上がったのが重源上人である。大規模な勧進活動をおこない、その再興に成功するとともに、その中で以後中世・近世と続いていく

奈良の町も姿をみせることになる。奈良を代表する行事の一つである東大寺修二会のなかで用いられる大松明は今も伊賀国名張郡（現三重県）から提供されているが、これは重源の呼びかけに答える形で、名張郡にあった東大寺領黒田庄からだされ始めたものであるという。春を呼ぶといわれているお水取りの「お松明」は中世の奈良とともに出発し今に至っているのである。

9月9日

戦国期奈良の城と町

千田 嘉博

世界遺産・奈良といえば、奈良時代の歴史遺産を思い浮かべる。しかし歴史遺産は幾多の変遷を経て残されたことに注意が必要である。古代の築地で区切られた都市景観から、街路沿いに建物が建ち並ぶ中世的都市景観への変遷は11世紀頃におきた。そして南都は多数の坊院によって構成された興福寺を核とする門前郷として発達した。

門跡寺院の大乗院は、現在の奈良ホテル南側に位置した。現在、庭園跡の整備が進んでいる。奈良ホテルの建つ山が鬼薊山で、15世紀に山城が築かれはじめたが、工事途中で東隣の西方院山に場所を移転して城は完成した。つまり大乗院は門跡寺院として、いざというときの軍事拠点を備えたのである。この城跡の遺構はよく残る。戦国期には松永久秀が多聞城を南都に築いた。南都を城下町化し興福寺の都市支配権を奪おうとした久秀の試みは最終的に挫折したが、奈良における近世への転換を告げるものであった。

< 5 > 第16回 桜井市生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

- <開 講 年> 1992年
- <テ ー マ> 郷土を学び、新しい時代を知る
- <募集定員> 100人（全5回）
- <会 場> まほろばセンター
- <共 催> 桜井市教育委員会・奈良大学教養部

5月20日

被害者化

増本 弘文

20世紀は犯罪者の時代とされ、犯罪者の人権や権利、さらには社会復帰が強調された。その影で、被害者には十分な配慮がなされなかった。21世紀は、被害者にも配慮した刑事司法となるのだろうか？

6月17日

いま、大和の考古学は楽しい

水野 正好

大和の地は日本文化の源泉、母胎の地である。各地で発掘される成果は、日本文化、歴史のありようを考える上に大きな役割を果たしている。最近の話題や調査の結果を正しく歴史に位置づけ、人々の生き様、よろこび、哀しみ、憤り、和みを楽しく判りやすく話し、理解を求めた。その内容は以下の通り。

① いま話題の大和の道（1）

1. 倭国女王ヒミコ、崇神・垂仁・景行天皇の都の並ぶ上ツ道・山辺の道
2. 崇神・景行天皇陵・数多い皇親の墳墓連る上ツ道・山辺の道

② いま話題の大和の道（2）

1. 推古天皇・聖徳太子の遣隋使と唐使斐世清の山田道
2. 大化新政の立役者左大臣、右大臣の山田道

③ ミソギ・ハライの遺跡を考える

1. 流水に設けられたミソギの建物と施設・古墳にも登場
2. 齊明天皇離宮のミソギ施設・アスカ酒船石遺跡と四天王寺亀井水

④ 日中交流の架け橋

1. 遣隋使・遣唐使一第8次使節団からその実態を知る
2. 帰国できなかった使節の人々—阿倍仲麻呂と井真成、そして水手たち

7月29日

生涯学習と人権文化

喜多 俊 幸

今日「生涯学習の時代」といわれており、その法的整備や具体的な施策、市民レベルでの種々の取り組みがされています。教育基本法に新たに「生涯学習の理念」が規定されるなど、生涯にわたって学習できる社会の実現に向けた方向が示されました。

一方、21世紀は「人権の世紀」といわれるように、人権が尊重され擁護される社会の実現のため、あらゆる人々が生涯のあらゆる機会を通じて、人権に関する正しい知識を習得するとともに、自分で考え、判断し、話し合っ問題解決する技能を培い、これを日常の態度として身に付けるための、また、これらに取り組もうとする雰囲気醸成することが必要であり、生涯学習に位置づけた取り組みが望まれています。

生涯学習社会を生きる態度を養うとともに、人権感覚を身に付けるスキルについて考えた。

9月9日

好きで嫌いな中国人

蘇 徳 昌

中国古代文化・近年の経済高度成長に尊敬・感謝・驚異の念を抱きながら、日中の対立や来日中国人の悪行を目の当たりにしては憤慨しているのが現状であろう。好きで嫌いな国民、それが中国人。果たして中国人とは？

10月21日

地球温暖化

—我々のしてきたこと、これからなすべきこと—

中 川 寿 夫

今年の冬は異常に暖かい。これも進行しつつある地球温暖化の影響の一つの現れであるといわれている。ここでは地球温暖化の現状を正確に把握することから出発し、その原因と対策、そして将来について、我々の日常生活様式との係わりから考えてみる。

平成9年度版環境白書のなかで、当時の環境庁は地球温暖化について次のように述べている：
現在、人類は様々な環境問題に直面しているが、その予想される影響の大きさや深刻さ、また必要となる対策の幅広さ（さらにはそれゆえの対策の難しさ）という点で、地球温暖化問題は最大の環境問題の一つと言える。

平成9年といえば、COP3が京都で開催され、日本において地球温暖化問題に関する関心が一気に盛り上がった年であった。この年以降、日本における関心、取り組みは如何なる経緯を経て、如何なる進展を見せたのであろうか。

自戒の念を込めつつも我々は、

- ・少なくとも事態を正確に認識し、
- ・我々にとって常識的な日常生活様式のどこが（何が）この問題と結節しているのかを理解し、
※エネルギー多消費構造によりかかったライフスタイル
- ・可能などころから第一歩を踏み出すと共に、
※4つのRとその優先順位：

拒否（Refuse）→削減（Reduce）→再使用（Re-use）→リサイクル（Recycle）

- ・地球環境／生態系の保全のために必要な行動をとらなくてはならない。

< 6 > 第15回 都祁生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

<開 講 年> 1993年

<テ ー マ> 自己実現をはかる生涯学習

<募集定員> 60人（全4回）

<会 場> 都祁公民館

<共 催> 奈良市都祁公民館・奈良大学教養部

6月3日

平城京とその時代

水野正好

平城京は「文字」が横溢する都市である。日本全国から平城京に送られてくる品々には国・郡・郷名や送り主の氏名、それに文物の名、数量、発送の年月日を記した木簡（札）が付けられている。木簡の地名や住人名、特産物名などリストしていくと鮮やかに日本の当時の経済を支える基盤が浮かび上る。東大寺や盧舎那大仏の建造資材を送る現場の機関と政府機関との間に交わされる多くの往復文書からは、機関の在り方や調達、搬送の具体相が見事に描き出されてくる。長屋王と多くの文人や新羅使節との友誼交流の庭園宴席で交わされた漢詩の相聞は漢詩集「懷風藻」から心ゆくまでの交流の様子が味わえる。国分寺・国分尼寺の建設に伴って需要が一挙に高まった仏教経典の写経は国家、貴族、寺々の大関心事、今日まで写経に携わることで名をのこした人がいかに多いかを想い、その写経生に課せられていた労働のきびしさが如何ほどのものであったかといった、奈良の都の時代相の数々をこの講義では具体的に楽しくお話し、理解を求めた。

6月17日

文学の中の老い

大町公

戦後日本の〈老いと介護〉の問題を考える際、これまでは、二つの「介護文学」作品で、つまり1972年刊の有吉佐和子『恍惚の人』から1995年刊の佐江衆一『黄落』へ、という形でなされてきた。それには十分な理由が考えられる。

『黄落』の中では、米寿の「母」は回りの者への迷惑と、みずからの認知症の進行を恐れ、「食断ち」を始め、「尊厳死」の道を選ぶ。著者の佐江もエッセイ集『老い方の探求』の中で、「自分も母のように死にたい」と、この死を肯定している。

もう一つの道も考えなければならない。〈認知症を生きる〉という道である。これは、2003年、小沢勲『痴呆を生きるということ』（岩波新書）出版以来、評価され出した。文学作品としては、昨今、耕治人（こう・はると）の「命終三部作」が脚光を浴びている。認知症の妻を夫が介護する私小説である。それらの作品から、この問題を考えたい。

7月8日

暦学と生活感覚

山田隆敏

「年」という字を漢和辞典で引いてみると、この字は農業と深い関わりでできていることが分かります。年という字は千と禾が合わさって出来ています。千というのは総てという意味であり、禾は稲のことなのです。上についている「ノ」は稲の穂が垂れている形で、これが転じて、すべての穀物を意味するようになりました。漢民族が天より与えられたためた「草」とともに、四

季が一回りして「千」の穀物が良く稔り、収穫の終わる期間、それが年であります。年は一周ということで、輪として例えられます。「輪」を記号で表わしますと円、○という形になります。年が続くと無限大という∞の記号で表わします。ドイツの数学者のメビウスは、∞を立体的に考案して「メビウスの輪」を編み出しました。一枚の細長い紙を一つひねって両端を糊付けすれば出来上がります。紙の面を辿っていくと、やがて元のところに戻ってきます。いくら行っても戻ってきます。だからこの面は無限に続いていることになります。ここから人は生涯を平坦な長い線で捉えるのではなく、年という「輪」で区切って続けていくことを自然の有様から学んだのです。これを仏教的に表現すれば「輪廻転生の輪」とも言えるでしょう。一説によれば、稲作技術が山添村辺りに伝えられてから約1500年、仏教と共に漢字が中国から伝えられてから約2000年になります。中国「文明」(civilization)が日本に伝わり、日本「文化」(culture)として花(華)開いてから2000年後の今年の9月、神戸と大阪を中心に第9回世界「華」商大会が開催されます。華商とは華僑および華人のビジネスマンの総称になります。日中がお互い経済的に相互依存している今日、新たに広くアジアの現状を見つめたいと考えます。

7月15日

小説『プライドと偏見』をめぐって

中尾 真理

ジェイン・オースティンはイギリス小説の伝統の中でも重要な作家とみなされ、同時に、こよなく愛される人気作家でもある。一口に英国小説と言っても、スコットランド、アイルランド、ウェールズ系の作家が多い中で、オースティンはロンドンに程近い田舎に生まれ、父親は英国国教会の教会区牧師、兄たちも牧師や海軍提督という家に生まれ育ち、純粋に英国(イングランド)的な作家であると言える。それが1990年代以降、ハリウッド映画などで映像化され、今やオースティンは英国人だけのものでなく、アメリカでも日本でも「メジャーな」作家となった感がある。本講座では以下の3項目に沿って、オースティンという作家について、およびオースティンの代表作『高慢と偏見(Pride and Prejudice)』を紹介したい。

- (1) 昨今のオースティン・ブーム
- (2) 「隅におけない妹」・・・牧師一家という環境
- (3) 「プライド」か「高慢」か・・・小説の読み方

< 7 > 第10回 こおりやま市民大学

- <開 講 年> 1998年
- <テ ー マ> 歴史・文化や今日的課題に学び、21世紀を夢と希望に満ちた人生に
- <募集定員> 100人(全6回)
- <会 場> 大和郡山市中央公民館
- <共 催> 大和郡山市中央公民館・奈良大学

回	開講日	演題	講師
1	6月2日(土)	聖徳太子の都市創り	教授 酒井龍一
2	6月9日(土)	平城京の南辺	教授 寺崎保広
3	6月16日(土)	源氏物語の人物像 一変容と物語の本性一	准教授 滝川幸司
4	6月23日(土)	豊臣秀長と郡山	准教授 河内将芳
5	6月30日(土)	インドの世界遺産	講師 松川恭子
6	7月7日(土)	被害者と犯罪者	准教授 増本弘文

＜ 8 ＞ 公開講座フェスタ2007 (阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット)

- ＜加盟年＞ 1999年
 ＜奈良大学担当開講日＞ 11月19日(月)
 ＜講師＞ 東野治之 教授
 ＜演題＞ 発掘された万葉仮名文
 ＜募集定員＞ 180人
 ＜会場＞ 大阪府立文化情報センター

【(2) に分類される講座】

＜ 1 ＞ 教職員のための夏の公開講座

- ＜開講年＞ 2003年
 ＜奈良大学担当開講日＞ 8月6日(月)
 午前 ＜講師＞ 森田憲司 教授
 ＜演題＞ 中国学の今 一史料へのアプローチと研究一
 午後 ＜講師＞ 高橋春成 教授
 ＜演題＞ ガラパゴス諸島に行って学生たちと考えたこと
 ＜募集定員＞ 50人
 ＜会場＞ 奈良大学総合研究棟
 ＜後援＞ 奈良県立教育研究所

＜ 2 ＞ 奈良県大学連合「なら講座2007」

- ＜開講年＞ 2001年
 ＜奈良大学担当開講日＞ 9月22日(土)
 ＜講師＞ 三木理史 准教授

- <演 題> 鉄道史からみた奈良県
- <募集定員> 150人
- <会 場> 奈良女子大学 記念館2階講堂
- <共 催> 奈良県下の12大学

【(3) に分類される講座】

< 1 > 奈良大学・飛鳥保存財団共催事業

<開 講 年> 2007年

【第1回】 飛鳥まるごとリレーウォーク

- <開 講 日> 5月26日(土)
- <テ ー マ> 歴史・考古・万葉で巡るキトラ古墳の世界
- <講 師> 白石太郎 教授
上野 誠 教授
水野正好 名誉教授
- <募集定員> 300人
- <会 場> 近鉄飛鳥駅～飛鳥資料館

【第2回】 飛鳥京～藤原京ウォーク

- <開 講 日> 9月8日(土)
- <テ ー マ> 2007年度 藤原京ルネッサンス
- <講 師> 寺崎保広 教授
- <募集定員> 100人
- <会 場> 石舞台～藤原京

< 2 > 奈良大学・南都銀行産学連携プログラム

- <開 講 年> 2007年
- <テ ー マ> 歴史・文化活動を通して、地域の活性化に貢献
- <募集定員> 各回40人

● 平城支店ロビーセミナー

- <開 講 日> 9月19日(水)
- <講 師> 寺崎保広 教授
- <演 題> 最古のお金・富本銭について
- <会 場> 平城支店ロビー

●【栄え・賑わう・愉しむ】観光、文化、産業、まちづくりを目指して

<開講日> 10月26日(金)

<講師> 東野治之 教授

<演題> 奈良時代の西大寺

<会場> 西大寺支店セミナールーム

※ 講座修了後、“西大寺の大茶盛”体験コラボレーション

●平城支店「雅楽の調べ」

<開講日> 11月30日(金)

<演者> 奈良大学雅楽研究会

<演題> 演舞・演奏

<会場> 平城支店ロビー

< 3 > 奈良大学・斑鳩町官学連携協力事業

<開講年> 2007年

<募集定員> 50人

<会場> 斑鳩町中央公民館

【第1回】生涯学習講座

<テーマ> 現代の諸問題に対処する、新たな挑戦

回	開講日	演題	講師
1	11月17日(土)	斑鳩を保存科学からみる	教授 西山要一
2	12月16日(日)	聖徳太子はいなかった?!	教授 寺崎保広
3	2月12日(火)	中高齢者の健康について	教授 田原武彦

【第1回】地域家庭教育講座

<テーマ> 地域社会・家庭内の教育実践力向上を目指して

回	開講日	演題	講師
1	10月26日(金)	こころのケアと健康	教授 前田泰宏
2	11月9日(金)	成長し続ける大人になるために	准教授 中戸義雄